



あとがき



2016 年春の年会で核データ部会企画セッションを担当いたしました。本号の会議のトピックス(I)にその趣旨説明と講師の方々の解説記事が掲載されておりますのでご覧ください。本企画セッションでは、原子力分野で近年注目されているミュオンを取り上げました。私とミュオンとの出会いは、2003 年にウプサラ大を訪問した際に遡ります。その当時、同大 TSL 研究所で中高エネルギー中性子核データ測定を行っていた Blomgren 教授グループが、中性子弾性散乱実験用のドリフトチェンバー数台を用いて、宇宙線ミュオンを用いた使用済燃料キャスク内トモグラフィーのフィジビリティ研究に取り組んでいました。宇宙線と原子力を組み合わせる斬新なアイデアに大変興味を持ちました。帰国後は、PHITS による簡易シミュレーションを行いその可能性を検討した程度で、実験装置開発までは至りませんでした。その後 2011 年に金政浩助教が弊研究室に着任したのを契機に、ミュオグラフィー用可搬型検出器開発を本格的に開始し、昨年度試作 1 号機が完成、キャンパス内建屋の透視に成功した段階です。また、2014 年秋からスタートした ImPACT 藤田プログラム（核変換による高レベル放射性廃棄物の大幅な低減・資源化）に参加することになり、負ミュオン捕獲反応を利用した核変換を提案された理研・松崎禎市郎氏（企画セッションの講師）との出会いも、ミュオンに対するさらなる興味を喚起することになりました。これらが縁となって、企画セッションのテーマとしてミュオンを提案した次第です。今後ミュオン関連核データが本格的に収集され、多くのユーザーに利用される時代が来るのかどうか、その予測は難しいですが、学生はじめ若手の方々と一緒にミュオン応用分野の新規開拓と基礎データ取得に向けチャレンジし続けたいと考えております。

さて、2016 年 9 月には核データ国際会議 ND2016 がベルギーのブルージュで予定されています。3 月にブリュッセルの空港や地下鉄で発生した連続爆破テロのため、参加には一抹の不安はありますが、二十数年振りのブルージュ訪問とウプサラ大のメンバーも含め多くの友人達との再会を楽しみにしています。次号では ND2016 報告特集が企画されることになるでしょう。参加者各位には編集委員会から執筆の依頼があるかと思いますが、快くお引き受け頂ければ幸いです。

渡辺 幸信 2016 年 6 月

日本原子力学会核データ部会

核データニュース編集小委員会

喜多尾憲助（元放医研）、井頭政之（東工大）、石川 眞（原子力機構）、
岩本 修（原子力機構）、中川庸雄（元原子力機構）、渡辺幸信（九大）、
山野直樹（福井大）、大塚直彦（IAEA）、中村詔司（原子力機構）、
小浦寛之（委員長、原子力機構） [編集] 石橋貞子